

# 鉢物用ホオズキ品種 ‘ 佐賀H1号 ’ および ‘ 佐賀H2号 ’ の育成

誌名	佐賀県農業試験研究センター研究報告
ISSN	13405241
著者名	高取,由佳 大藪,榮興 松村,司 松尾,洋一 中村,典義 川崎,孝和 千綿,龍志
発行元	佐賀県農業試験研究センター
巻/号	38号
掲載ページ	p. 1-17
発行年月	2017年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



## 鉢物用ホオズキ品種‘佐賀H1号’および‘佐賀H2号’の育成

高取由佳・大藪榮興<sup>1)</sup>・松村司・松尾洋一<sup>2)</sup>・中村典義<sup>3)</sup>・川崎孝和<sup>4)</sup>・千綿龍志<sup>5)</sup>  
(花き研究担当)

受理年月日:平成29年2月20日

キーワード:ホオズキ、育種、鉢物、宿存がく

New Chinese Lantern Plant Cultivars ‘Saga H1’ and ‘Saga H2’

Yuka TAKATORI, Eikou OYABU<sup>1)</sup>, Tsukasa MATSUMURA, Youichi MATSUO<sup>2)</sup>, Noriyoshi NAKAMURA<sup>3)</sup>,  
Takakazu KAWASAKI<sup>4)</sup> and Ryuushi CHIWATA<sup>5)</sup>  
(Laboratory of Flower and Ornamental Plants)

*Received: February 20, 2017*

Key words: Chinese Lantern Plant, Breeding, Potted Plant, Calyces

### 目 次

I 緒言	2
II 育種目標および育成経過	2
1. 育種目標と来歴	2
2. 育成経過	3
III 特性の概要	4
1. 形態的および生態的特性	4
2. 鉢物ホオズキとしての商品性	6
3. 鉢物ホオズキとしての現地適応性	7
IV 鉢物栽培技術の確立	8
1. ‘佐賀H1号’	8
2. ‘佐賀H2号’	11
V 考察	14
VI 摘要	15
引用文献	15
Summary	15

脚注 1)元 佐賀県農業試験研究センター

2)現在 佐賀県上場宮農センター

3)現在 佐賀県茶業試験場

4)現在 佐賀県農業大学校

5)現在 佐賀県唐津農林事務所 東松浦農業改良普及センター

## I 緒言

本県では、県内各地域の特性を活かして、多彩な花き品目が栽培され、特産花きとして地域振興に貢献している。中でも、ホオズキは古くからお盆の供え物として欠かせない品目であり<sup>1)</sup>、県北部を中心として各地域で栽培され<sup>2)</sup>、関東・関西方面へ出荷されている<sup>3)</sup>。また、農協系統出荷率の高い品目でもあり<sup>3)</sup>、県内の主要な特産花き品目のひとつとなっている。

これまでに、ホオズキは、露地ミカン、施設イチゴの複合栽培品目として導入されたり、ハウスミカン農家において施設の有効利用策として導入されたりしてきた。切り枝として出荷する切り枝栽培では、施設栽培は訪花昆虫の導入により宿存がくの連続着生を確保できるものの、露地栽培はその年の気象条件等により宿存がくの着生が不安定となり、品質のバラつきが単価の変動にも大きく影響している。露地栽培が多い本県では、訪花昆虫を導入しなくても宿存がくが安定して連続着生するホオズキ品種の育成が要望されている。また、一部地域で行われている宿存がくだけを出荷する実とり栽培では、宿存がくの形状および着色が優れ、かつ、大きさが揃ったものをパックに詰めて出荷し、高単価で取り引きされている。パック出荷率を上げるため、宿存がくの連続着生に加えて、形状が優れ、かつ、大きさも揃うホオズキ品種の育成が要望されている。

そこで、佐賀県農業試験研究センターでは、切り枝および実とり栽培に適したホオズキ品種の育成に取り組み、宿存がくの着生および形状が優れる‘佐賀H1号’および‘佐賀H2号’を育成した。育成した2品種は、試験を進める中で、切り枝および実とり栽培としての用途よりも、鉢物栽培としての適性が優れることが新たに見いだされた。ここでは、育成品種‘佐賀H1号’および‘佐賀H2号’の来歴、育成経過、品種特性に加えて、両品種に適した鉢物栽培技術を確立したので報告する。

## II 育種目標および育成経過

### 1. 育種目標と来歴

当初、切り枝および実とり栽培に適したホオズキ品種の育成のため、育種目標を宿存がくの連続着生および形状が優れる品種として取り組み始めた。

‘米国自生野生系統’と‘佐賀市大和町在来紫茎変異系統’との交雑により得られた実生群の中からの選抜を進め、‘佐賀H1号’および‘佐賀H2号’を育成した。当初、育成した2品種は、宿存がくの連続着生および形状が優れたものの、宿存がくの着色がかなり遅いこと、草丈がやや低いことから、切り枝および実とり栽培には不向きと判断された。しかしながら、‘佐賀H1号’の水平方向に広がる特徴的な草姿、および‘佐賀H2号’のコンパクトな草姿は、鉢物栽培としての適性が優れることが新たに見いだされた。そこで、‘佐賀H1号’および‘佐賀H2号’は、鉢物栽培に向く品種として位置づけることで、品種登録出願へ進めるとともに、両品種に適した鉢物栽培技術の確立に取り組んだ。

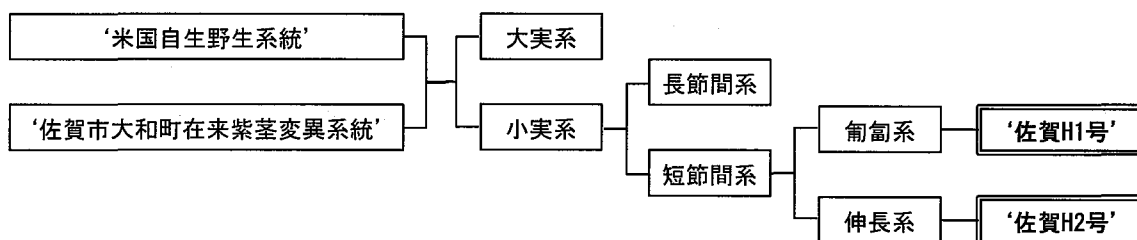
### 2. 育成経過

ホオズキ‘佐賀H1号’および‘佐賀H2号’の系譜を第1図に、育成経過を第1表に示した。

1999年度に、‘米国自生野生系統’を種子親、‘佐賀市大和町在来紫茎変異系統’を花粉親とした交雑を行い、F<sub>1</sub>種子を獲得した。以降、得られた後代の選抜と自殖を繰り返して固定化を進めた。なお、それぞれの世代

において、宿存がくの着生率および形状が優れる個体を選抜した。2000年度に、 $F_1$ 種子を播種して実生を展開したところ、宿存がくの大きさにより、大実系と小実系に分離したため、形状が優れた小実系を選抜してその自殖種子を獲得した。2001年度に、 $F_2$ 世代を展開したところ、節間長の長さにより、長節間系と短節間系に分離したため、短節間系を選抜してその自殖種子を獲得した。2002年度に、 $F_3$ 世代を展開したところ、草姿の違いにより、匍匐系と伸長系に分離したため、両系統ともに選抜してその自殖種子を獲得した。2003年度に、それぞれの系統の $F_4$ 世代を展開したところ、匍匐系と伸長系の形質、ならびに小実系、短節間系の形質が安定して発現したことから、2003年度末に佐系番号を付与し、匍匐系を‘佐系1号’、伸長系を‘佐系2号’として、次の試験へ進めた。

‘佐系1号’および‘佐系2号’の栽培適応性検定試験を2004年度～2006年度の3年間取り組んだ中で、両系統は切り枝および実とり栽培の適性よりも、鉢物栽培としての適性が高いと判断した。そこで、鉢物ホオズキとしての商品性の評価を2005年度～2006年度の2年間で実施した結果、商品性は高いと判断し、2005年度末に佐賀番号を付与して、それぞれを‘佐賀1号’および‘佐賀2号’とした。両系統の現地適応性検定試験を2006年度に実施した結果、現地農家からも高い評価が得られ、2006年度末の品種育成検討会において、‘佐賀1号’および‘佐賀2号’ともに、鉢物として有望であると判断した。そこで、それぞれを‘佐賀H1号’および‘佐賀H2号’として、2007年3月26日に品種登録出願を行い、同年8月3日に品種登録出願が公表された。また、‘佐賀H1号’は2009年6月25日に品種登録され(登録番号 第18263号)、『佐賀H2号’は2010年1月14日に品種登録された(登録番号 第18781号)。



第1図 ‘佐賀H1号’ および ‘佐賀H2号’ の系譜

第1表 ‘佐賀H1号’ および ‘佐賀H2号’ の育成経過

試験年度	試験名	備考
1999	交雑	
2000	一次選抜( $F_1$ 選抜、自殖による $F_2$ 作出)	
2001	二次選抜( $F_2$ 選抜、自殖による $F_3$ 作出)	
2002	三次選抜( $F_3$ 選抜、自殖による $F_4$ 作出)	
2003	四次選抜( $F_4$ 選抜、自殖による $F_5$ 作出)	佐系番号付与
2004	栽培適応性検定試験(1年目)	
2005	栽培適応性検定試験(2年目)、商品性評価(1年目)	佐賀番号付与
2006	栽培適応性検定試験(3年目)、商品性評価(2年目)、現地適応性検定試験	品種登録出願
2007	品種登録出願公表	
2009	‘佐賀H1号’ 品種登録(登録番号 第18263号)	
2010	‘佐賀H2号’ 品種登録(登録番号 第18781号)	

### Ⅲ 特性の概要

#### 1. 形態的および生態的特性

‘佐賀H1号’および‘佐賀H2号’の草姿、葉、花および宿存がくに関する形態的および生態的特性は、第2表～第4表のとおりである。なお、両品種の特性値は、2005年度にセンター内圃場において実施した特性調査の値である。

##### 1) ‘佐賀H1号’

‘佐賀H1号’は、数枚の葉を展葉した後に、茎頂に花(宿存がく)が着生して芯止まりとなり、側枝が伸長していく。これを繰り返すため、匍匐しながら水平方向に広がっていく特徴的な草姿となり、草丈は22.8cmと低く、節数も7.2節とかなり少ない(第2表)。葉は、卵形の形状であり、葉身長が13.6cmと短く、葉縁の鋸歯はかなり少ない(第3表)。花は、1節に2花以上が着生し、宿存がくも1節に2～4個が着生する節が多い。また、宿存がくは、心臓形の形状であり、長さが4.1cmと短く、幅も5.5cmとやや狭いため、小振りで整った形状のものが着生し、成熟すると明赤橙色(JHS No. 1005)に着色する(第4表)。

したがって、‘佐賀H1号’を鉢物として栽培した場合、茎葉が叢生して繁茂し、鉢からこぼれるように着生した宿存がくを觀賞することができる(写真1)。

##### 2) ‘佐賀H2号’

‘佐賀H2号’は、一般的なホオズキと同様に直立性であり、垂直方向に伸長していく草姿となり、草丈は119.0cmと中程度で、対照の‘大和町在来’と比較するとやや短い(第2表)。葉は、卵形の形状であり、葉縁の鋸歯は中程度である(第3表)。花は、1節に2花以上が着生し、宿存がくも1節に2個以上が着生する節もみられ、1株当たりの着生数も18.4個と、対照の‘大和町在来’と比較して、かなり多い。また、宿存がくは、心臓形の形状であり、幅が5.1cmとやや狭いため、縦長気味の小振りで整った形状のものが着生し、成熟すると明赤橙色(JHS No. 1005)に着色する(第4表)。

したがって、‘佐賀H2号’を鉢物として栽培した場合、草丈伸長抑制のためのわい化剤利用の必要が無く、下位節から上位節まで連続的に着生した宿存がくを觀賞することができる(写真2)。

第2表 ‘佐賀H1号’および‘佐賀H2号’の草姿に関する特性<sup>a)</sup>

形質	佐賀H1号		佐賀H2号		大和町在来(対照)	
	特性	測定値	特性	測定値	特性	測定値
草型	匍匐性		直立性		直立性	
草性	叢性		高性		高性	
草丈	低	22.8cm	中	119.0cm	高	131.7cm
節数	かなり少	7.2節	中	31.0節	中	30.1節
節間長	短	3.7cm	短	5.1cm	短	5.4cm
茎の太さ	細	6.0mm	細	8.4mm	細	8.8mm
茎の色	緑		緑		緑	

<sup>a)</sup> 耕種概要: 定植 2005年2月7日、収穫調査 8月1日、栽植密度 約1,000本/a  
 施肥量 基肥 N P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> K<sub>2</sub>O 各1kg/a、放花昆虫の導入無し

第3表 '佐賀H1号'および'佐賀H2号'の葉に関する特性<sup>a)</sup>

形質	佐賀H1号		佐賀H2号		大和町在来(対照)	
	特性	測定値	特性	測定値	特性	測定値
葉身の形	卵形		卵形		卵形	
葉身長	短	13.6cm	中	17.1cm	中	17.3cm
葉幅	中	12.2cm	中	11.9cm	中	12.5cm
葉表色	緑		緑		緑	
葉裏色	緑		緑		緑	
葉の光沢	有		有		有	
葉表面の毛じ	無		無		無	
葉裏面の毛じ	無		無		無	
葉縁の鋸歯	かなり少		中		やや少	
葉柄長	中	4.7cm	中	5.0cm	中	4.7cm

<sup>a)</sup>耕種概要：第2表と同様第4表 '佐賀H1号'および'佐賀H2号'の花、宿存がくに関する特性<sup>a)</sup>

形質	佐賀H1号		佐賀H2号		大和町在来(対照)	
	特性	測定値	特性	測定値	特性	測定値
花房当たりの花数	2花以上		2花以上		1花	
第一花着生節位	低		かなり低		低	
花の大きさ	中	3.2cm	中	3.0cm	中	3.3cm
花色 <sup>b)</sup>	黄白	No. 3302	黄白	No. 3302	黄白	No. 3302
花喉部の斑点の有無	無		無		無	
宿存がくの形	心臓形		心臓形		心臓形	
宿存がくの頂部の形	突形		突形		突形	
宿存がくの長さ	短	4.1cm	中	6.1cm	中	6.3cm
宿存がくの幅	やや狭	5.5cm	やや狭	5.1cm	中	6.4cm
宿存がくの色 <sup>b)</sup>	明赤橙	No. 1005	明赤橙	No. 1005	明赤橙	No. 1005
宿存がく表面のしわ	中		中		中	
宿存がくの稜の数	多	8.9本	多	10.0本	多	11.0本
宿存がくの裂開の有無	無		無			
宿存がく着生数	多	13.7個	かなり多	18.4個	多	14.0個

<sup>a)</sup>耕種概要：第2表と同様<sup>b)</sup>測定値はJHSカラーチャートの数値

## 2. 鉢物ホオズキとしての商品性

夏の風物詩にもなっている「ほおずき市」は、東京の浅草寺で毎年、四万六千日に当たる7月9日～10日に開催されるものが代表的であるが、日本の各地域で7月～8月に開催されている<sup>4)</sup>。その中で、風鈴とセットで販売される鉢物ホオズキは、切り枝ホオズキと並んで欠かせない商材となっている。また、鉢物ホオズキは、葉と着色した宿存がくとの色彩のコントラストに加えて、宿存がくの色の変化についても観賞することができ、切り枝ホオズキと比較して観賞期間が長い。‘佐賀H1号’および‘佐賀H2号’は、鉢物栽培としての適性が高いと判断され、特に、‘佐賀H1号’は特徴的な草姿であることから、鉢物ホオズキとしての市場流通における商品性を評価した。評価については、大田花き(東京)、九州日観(福岡)および佐賀花市場(佐賀)の3市場に両品種の鉢物を持ち込んで、市場担当者からの意見を聞くことにより行った。

各市場からの‘佐賀H1号’および‘佐賀H2号’の鉢物に対する商品性の評価は、第5表のとおりであり、鉢物ホオズキを取り扱う市場からは高い評価が得られた。‘佐賀H1号’については、大田花きから、一般的なホオズキとは異なる特徴的な草姿により市場性は非常に高いとの評価が、九州日観からは、特徴的な草姿を活かす仕立て技術等を確立できれば、市場性は高いとの評価が得られた。また、佐賀花市場からは、これまでに鉢物ホオズキの取扱い実績がなく、県内で流通する可能性は低いとの評価であった。

‘佐賀H2号’については、宿存がくの連続着生が安定して優れるのであれば、市場性は大田花きから高い、九州日観から非常に高いとの評価が得られた。また、佐賀花市場からは、‘佐賀H2号’の宿存がくの連続着生は在来系統と比較すると極めて優れており、切り枝としての出荷を検討してほしいとの意見も出された。

したがって、‘佐賀H1号’および‘佐賀H2号’は、鉢物ホオズキを取り扱う市場へ出荷すれば流通する見込みは十分にあることから、鉢物としての商品性は高いと考えられた。しかし、両品種の特性を活かした鉢物を生産することが必要で、‘佐賀H1号’では特徴的な草姿を確保するための栽培技術、‘佐賀H2号’では宿存がくを安定して連続着生させるための栽培技術を確立するべきであることが課題として残った。

第5表 ‘佐賀H1号’および‘佐賀H2号’の鉢物としての商品性評価<sup>a)</sup>

品種	市場	評価 <sup>b)</sup>	意見
佐賀H1号	大田花き (東京)	◎	・特徴的な草姿で、市場性は非常に高い ・鉢でボリュームが異なるため、栽培法の確立が必要
	九州日観 (福岡)	○	・特徴的な草姿で、市場性は高い ・草姿がバラついているため、仕立て法の確立が必要
	佐賀花市場 (佐賀)	×	・鉢物ホオズキは取り扱っておらず、県内の流通は厳しい
佐賀H2号	大田花き (東京)	○	・宿存がくの着生数が多く、市場性は高い ・宿存がくが安定して連続着生する栽培法の確立が必要
	九州日観 (福岡)	◎	・宿存がくの着生数が多く、市場性は非常に高い ・宿存がくが安定して連続着生する栽培法の確立が必要
	佐賀花市場 (佐賀)	×	・鉢物ホオズキは取り扱っておらず、県内の流通は厳しい ・宿存がくの着生が優れ、切り枝としての市場性は非常に高い

<sup>a)</sup>2005年度および2006年度に鉢物を持ち込んで意見を聞いた

<sup>b)</sup>◎：非常に高い、○：高い、×：低い

### 3. 鉢物ホオズキとしての現地適応性

‘佐賀H1号’および‘佐賀H2号’の育成当時、県内で鉢物ホオズキを栽培している農家はいなかったため、現地適応性検定試験は、シクラメンやアジサイ等を栽培する鉢物農家1戸、ペチュニアやプリムラ等を栽培する花苗農家2戸、切り枝ホオズキを栽培するホオズキ農家2戸の合計5戸の農家に栽培を委託し、両品種の栽培性に関する意見を聞いた。

現地適応性検定試験における委託農家からの‘佐賀H1号’および‘佐賀H2号’に対する評価は、第6表のとおりであり、両品種ともに、鉢物および花苗農家からの評価が非常に高く、また、ホオズキ農家からの評価も高かった。鉢物および花苗農家は底面給水により、ホオズキ農家は上部かん水により栽培した。上部かん水による栽培では、地上部の生育が進むと土が乾きやすいことから、かん水にかかる労力が非常に大きかった。

‘佐賀H1号’については、商品性と同様に一般的なホオズキとは異なる特徴的な草姿が高く評価され、特に鉢物農家からは、夏季の鉢物として魅力的な素材であるとの意見であった。ホオズキ農家からは、独自性が強過ぎる草姿のため、ブランドとして定着させるにはPR策が必要との意見もあった。また、農家によっては、側枝の発生本数が少ない株や節間長が長くなって間伸びした株があり、鉢物の姿にバラつきがみられた。

‘佐賀H2号’については、草丈が伸び過ぎないためコンパクトな草姿であり、訪花昆虫を導入せずとも宿存がくの着生が優れるため栽培しやすいと、すべての農家から高い評価が得られた。また、着生する宿存がくは小振りて優れた形状のものが多いことから、実とり栽培についても検討したいとの意見も出された。しかし、一部では宿存がくの着生数が少ない株もみられた。

これらのことから、‘佐賀H1号’および‘佐賀H2号’の鉢物栽培は、現地適応性検定試験委託農家から、品種登録した場合には栽培を希望したいとの高い評価が得られた。しかし、ここでも商品性と同様に、両品種の特性を活かした鉢物を安定して生産するための栽培技術の確立が課題として残った。両品種の鉢物栽培技術を確立し、栽培指針を作成すれば、両品種の現地農家への普及推進拡大が期待できる。また、今回、栽培を委託した鉢物農家はシクラメンを栽培する農家であり、鉢物ホオズキの栽培はシクラメン栽培用の資材を併用できること、さらに、シクラメンの栽培にかかる作業時期と競合せず、労力の分散が可能であったことから、シクラメン農家の複合栽培品目として導入できる可能性が高いことも示唆された。

第6表 ‘佐賀H1号’および‘佐賀H2号’の鉢物としての現地適応性評価<sup>a)</sup>

品種	農家	評価 <sup>b)</sup>	意見
佐賀H1号	鉢物・花苗農家	◎	<ul style="list-style-type: none"> <li>・従来の鉢物にはない草姿で大変興味深い</li> <li>・夏は鉢物商材が少なく、利用価値が高い</li> <li>・草姿が、株によりややバラつく(節間長、側枝数)</li> </ul>
	ホオズキ農家	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特徴的な草姿に興味深い、ブランド化にはPR策が必要</li> <li>・草姿が、株によりややバラつく(側枝数)</li> <li>・乾きやすく、かん水労力が大きい</li> </ul>
佐賀H2号	鉢物・花苗農家	◎	<ul style="list-style-type: none"> <li>・草丈が伸び過ぎないため、コンパクトな草姿となる</li> <li>・夏は鉢物商材が少なく、利用価値が高い</li> <li>・宿存がくの形状は優れるが、着生数が株によりややバラつく</li> </ul>
	ホオズキ農家	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>・宿存がくの着生が、非常に優れる</li> <li>・ハダニによる被害が多かった</li> <li>・乾きやすく、かん水労力が大きい</li> </ul>

<sup>a)</sup>2006年度に5戸の農家で実施(鉢物農家:1戸、花苗農家:2戸、ホオズキ農家:2戸)

<sup>b)</sup>◎:非常に高い、○:高い、×:低い



## IV 鉢物栽培技術の確立

‘佐賀 H1 号’ および ‘佐賀 H2 号’ は、鉢物栽培に適した品種として品種登録出願を行ったが、鉢物としての栽培技術については未確立な部分も多く、また、商品性および現地適応性を評価した際にも、両品種の特性を活かして鉢物を安定的に生産するための栽培技術の確立が必要であった。そこで、‘佐賀 H1 号’ および ‘佐賀 H2 号’ について、それぞれの品種特性を活かした鉢物栽培技術の確立を目的に、適正施肥量、鉢容量と草姿の関係、さらには、植物成長調整剤の利用について検討した。

### 1. ‘佐賀 H1 号’

‘佐賀 H1 号’ は、茎頂に花(宿存がく)が着生して芯止まりとなり、側枝が伸長することを繰り返すため、水平方向に広がる草姿となる。しかし、地上部の生育が緩慢であったり、側枝の発生が少なかつたりした場合、茎葉および宿存がくの着生数が減少し、鉢物品質が低下する。そこで、地上部の生育を確保するための栽培技術として、適正施肥量を把握するとともに、鉢容量が草姿に及ぼす影響について検討した。さらに、植物成長調整剤としてベンジルアミノプリン(商品名：ビーエー液剤、ベンジルアミノプリン 3.0%、以降 BA と表記)処理による側枝の発生促進および宿存がく着生数増加効果を検討した。

#### 1) 適正施肥量の検討

‘佐賀 H1 号’ の鉢物栽培では、地上部の生育が緩慢過ぎると、貧弱な鉢姿になってしまう。そこで、本試験では ‘佐賀 H1 号’ の適正施肥量の把握を目的に、施肥量の違いが地上部の生育に及ぼす影響について、5号鉢(直径 15cm)を用いて試験した。試験区は、基肥施用量を培土 1L 当たりに窒素成分で 2.5g 施用する区を標準区として、1.25g 施用する減肥区、5.0g 施用する増肥区を設定した。さらに、基肥施用量は 1.25g で、追肥として 1.25g 相当を液肥により施用する区を追肥区とした。なお、基肥にはエコロング 100 日タイプ(14-12-14)、追肥には液肥特 2号(10-4-8)を用いた。地下茎を 2009 年 4 月 10 日に底面給水型プラ鉢に定植し、整枝は行わなかった。

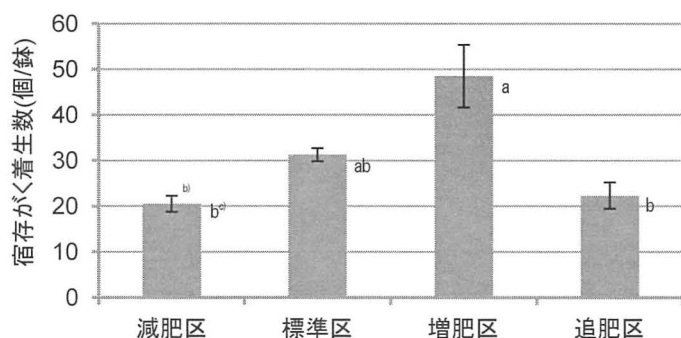
出荷時の 7 月 24 日における鉢姿は、標準区および増肥区では茎葉が繁茂し、葉色も濃く、地上部の生育量を確保できた(第 7 表、写真 3)。また、1鉢当たりの宿存がく着生数も多く、鉢物品質は非常に優れた(第 2 図)。一方、減肥区では地上部の生育が緩慢で、葉色も薄く、1鉢当たりの宿存がく着生数も少なくなる傾向にあり、鉢物品質が劣った。追肥区でも葉色は追肥したことにより標準区と同程度に回復したものの、株張りが悪く、1鉢当たりの宿存がく着生数も標準区と比較すると有意に少なく、鉢物品質は劣った。したがって、‘佐賀 H1 号’ の鉢物栽培における適正施肥量は、培土 1L 当たりに基肥として窒素成分で 2.5g 程度あれば十分であることが明らかとなった。

第7表 施肥量の違いが‘佐賀H1号’の生育に及ぼす影響<sup>a)</sup>

試験区	株高 (cm)	株径 (cm)	葉色 (SPAD値)	節数 (節/株)
減肥区	12.3 a <sup>b)</sup>	44.3 ab	35.6 c	7.1 ab
標準区	12.8 a	50.0 ab	43.7 b	8.1 a
増肥区	10.8 a	55.5 a	49.0 a	8.3 a
追肥区	9.7 a	38.3 b	41.2 b	6.7 b

<sup>a)</sup>耕種概要：底面給水型の5号鉢を用いて2009年4月10日に定植、7月24日に調査、試験規模は5鉢/試験区  
 施肥は培土 1L 当たりに窒素成分で、減肥区 1.25g(基肥)、標準区 2.5g(基肥)、増肥区 5.0g(基肥)、  
 追肥区 1.25g(基肥)+1.25g(追肥) を施用

<sup>b)</sup>Tukey の多重検定により、各項目の異符号間に 5%水準で有意差あり

第2図 施肥量の違いが‘佐賀H1号’の宿存がく着生数に及ぼす影響<sup>a)</sup><sup>a)</sup> 耕種概要：第7表と同様<sup>b)</sup> Barは標準誤差を示す<sup>c)</sup> Tukeyの多重検定により、異符号間に5%水準で有意差あり

## 2) 鉢容量と草姿の関係

根域が制限されると地上部の生育も抑制されるため、鉢容量が小さい鉢で‘佐賀H1号’を栽培すると、コンパクトな鉢姿になることが想定できる。そこで、5号鉢(直径15cm)での栽培を対照として、小さい鉢容量の4号鉢(直径12cm)で栽培した場合の鉢姿について検討した。なお、施肥は、基肥として培土1L当たりに窒素成分で2.5gをエコロング100日タイプ(14-12-14)により施用した。地下茎を2010年4月13日に底面給水型プラ鉢に定植し、整枝は行わなかった。

出荷時の7月29日における鉢姿は、4号鉢と5号鉢との間で、株高、株径、1鉢当たりの側枝発生本数および宿存がく着生数、すべての項目について有意な差は認められず、同程度の地上部の生育量となった(第8表)。しかし、4号鉢では鉢容量に対しての地上部の生育が旺盛であり、ややバランスの悪い鉢姿となることから、‘佐賀H1号’には5号鉢が適した鉢容量と考えられた。

第8表 鉢容量の違いが‘佐賀H1号’の生育に及ぼす影響<sup>a)</sup>

鉢容量	株高 (cm)	株径 (cm)	側枝発生本数 (本/鉢)	宿存がく着生数 (個/鉢)	鉢姿
4号鉢	16.5	53.3	10.0	46.3±8.58	やや悪
5号鉢	16.0	51.5	10.3	56.0±4.02	良
有意性 <sup>b)</sup>	ns	ns	ns	ns	-

<sup>a)</sup> 耕種概要：底面給水型の鉢を用いて、2010年4月13日に定植、7月29日に調査、試験規模は5鉢/試験区

施肥は培土1L当たりに窒素成分で2.5gを基肥として施用

<sup>b)</sup> t検定により、nsは有意差なし

## 3) 植物成長調整剤(BA)による草姿改善

‘佐賀H1号’は、側枝が伸長して水平方向に広がる草姿となるため、側枝の発生が少ないと、貧弱な鉢姿になってしまう。そこで、側枝の発生促進とそれに伴う宿存がくの着生数増加を目的に、BA処理の処理濃度および処理回数について試験した。なお、鉢容量は5号鉢(直径15cm)を用い、施肥は基肥として培土1L当たりに窒素成分で2.5gをエコロング100日タイプ(14-12-14)により施用した。地下茎を2009年4月10日に底面給水型プラ鉢に定植し、整枝は行わなかった。試験区は、BA処理濃度の試験では、無処理区を対照として、6月2日にBA 60ppm(ビーエー液剤、500倍液)を茎葉散布する60ppm区、BA 30ppm(ビーエー液剤、1000倍液)を茎葉散布す

る 30ppm 区を設定した。また、BA 処理回数の試験では、無処理区を対照として、BA 30ppm を 6 月 2 日に茎葉散布する 1 回処理区、6 月 2 日および 2 週間後の 6 月 16 日に茎葉散布する 2 回処理区を設定した。

出荷時の 7 月 24 日における鉢姿は、BA 処理濃度の試験では、すべての試験区間において、株高および株径に有意な差は認められず、同程度の鉢物品質であった(第 9 表)。1 鉢当たりの側枝の発生本数および宿存がく着生数は、BA 処理によりやや増加する傾向にあったものの、処理濃度による有意な差は認められなかった。また、BA 処理回数の試験では、株高は、すべての試験区間で同程度であったが、株径は、2 回処理区が 1 回処理区と比較して有意に大きく、鉢物としての品質向上効果がみられた(第 10 表)。1 鉢当たりの側枝の発生本数は、濃度試験と同様に BA 処理によりやや増加する傾向にあったものの、処理回数による有意な差は認められなかった。しかし、宿存がくの着生数は、6 月上旬および中旬の 2 回処理区では無処理区と比較すると有意に増加した。したがって、生育途中の‘佐賀 H1 号’への BA 処理は、側枝の発生本数を大幅に増加させるような効果は認められなかったが、2 回処理により宿存がくの着生数を増加させる効果が認められた。

第9表 BA処理濃度の違いが‘佐賀H1号’の生育に及ぼす影響<sup>a)</sup>

試験区	株高 (cm)	株径 (cm)	側枝発生本数 (本)	宿存がく着生数 (個)
60ppm区	13.6 a <sup>b)</sup>	49.0 a	8.8 a	29.0±3.27 a
30ppm区	12.0 a	45.4 a	8.8 a	29.0±3.52 a
無処理(対照)	12.3 a	49.8 a	5.3 a	19.3±5.62 a

<sup>a)</sup>耕種概要：底面給水型の5号鉢を用いて2009年4月10日に定植、7月24日に調査、試験規模は5鉢/試験区

施肥は培土1L当たりに窒素成分で2.5gを基肥として施用

BA処理は60ppm区でピーエー液剤500倍液、30ppm区でピーエー液剤1000倍液を6月2日に茎葉散布

<sup>b)</sup>Tukeyの多重検定により、各項目の異符号間に5%水準で有意差あり

第10表 BA処理回数の違いが‘佐賀H1号’の生育に及ぼす影響<sup>a)</sup>

試験区	株高 (cm)	株径 (cm)	側枝発生本数 (本)	宿存がく着生数 (個)
2回処理区	12.2 a <sup>b)</sup>	56.0 a	8.0 a	39.8±2.87 a
1回処理区	12.0 a	45.4 b	8.8 a	29.0±3.52 ab
無処理(対照)	12.3 a	49.8 ab	5.3 a	19.3±5.62 b

<sup>a)</sup>耕種概要：第9表と同様

BA処理はピーエー液剤1000倍液を、1回処理区で6月2日、2回処理区で6月2日および6月16日に茎葉散布

<sup>b)</sup>Tukeyの多重検定により、各項目の異符号間に5%水準で有意差あり

## 2. ‘佐賀 H2 号’

‘佐賀 H2 号’は、草丈がやや短いため、鉢物栽培した場合にわい化剤利用の必要がなく、また、宿存がくの連続着生が優れる。しかし、地上部の生育が緩慢過ぎたり、逆に旺盛過ぎたりすると、鉢物としてのバランスが悪く、さらには宿存がく着生数の減少にもつながり、鉢物品質が低下する。そこで、鉢物としての適正なバランスを確保するための栽培技術として、適正施肥量を把握するとともに、鉢容量が草姿に及ぼす影響について検討した。また、出荷時の鉢姿は、着生した宿存がくの約半分を着色した状態にすることが理想であるため、植物成長調整剤としてエテホン(商品名：エスレル 10、エテホン 10.0%、以降エテホンと表記)処理による宿存がくの着色促進効果についても検討した。

### 1) 適正施肥量

‘佐賀 H2 号’は、宿存がくの連続着生が優れる特性を有するが、施肥条件によっては、地上部の生育量だけでなく、宿存がくの着生程度にまで悪影響を及ぼすことが懸念される。そこで、本試験では‘佐賀 H2 号’の適正施肥量の把握を目的に、施肥量の違いが地上部の生育および宿存がく着生程度に及ぼす影響について、5号鉢(直径 15cm)を用いて試験した。試験区は、‘佐賀 H1 号’と同様に基肥施用量を培土 1L 当たり窒素成分で 2.5g 施用する区を標準区として、1.25g 施用する減肥区、5.0g 施用する増肥区を設定した。さらに、基肥施用量は 1.25g で、追肥として 1.25g 相当を液肥により施用する区を追肥区とした。なお、基肥にはエコロング 100 日タイプ(14-12-14)、追肥には液肥特 2 号(10-4-8)を用いた。地下茎を 2009 年 4 月 10 日に底面給水型プラ鉢に定植し、1鉢当たり 4 本仕立てとなるよう整枝した。

出荷時の 7 月 24 日における鉢姿は、減肥区および追肥区、標準区、増肥区と、基肥施用量が多くなるにつれて、株高および株径は有意に大きくなり、地上部の生育量は基肥施用量に比例した(写真 4、第 11 表)。1株当たりの宿存がく着生数も同様で、基肥施用量が多くなるにつれて有意に増加した(第 3 図)。また、減肥区および追肥区では、宿存がくの着生率(全節数の内、宿存がくが着生した節の割合)が約 35%と、標準区や増肥区と比較して低い値であったことから、宿存がくが着生しない節が多くみられる「実飛び」現象が起こっていることも明らかとなった。5号鉢の鉢容量に対する地上部の生育量から判断すると、増肥区は生育旺盛になり過ぎることから、標準区がバランスの良い鉢姿と考えられた。

したがって、‘佐賀 H2 号’の鉢物栽培における適正施肥量は、培土 1L 当たり基肥として窒素成分で 2.5g 程度であることが明らかとなった。また、基肥施用量が少な過ぎると、宿存がくが着生しない節が多くみられる「実飛び」現象が起こることも明らかとなった。

第11表 施肥量の違いが‘佐賀H2号’の生育に及ぼす影響<sup>a)</sup>

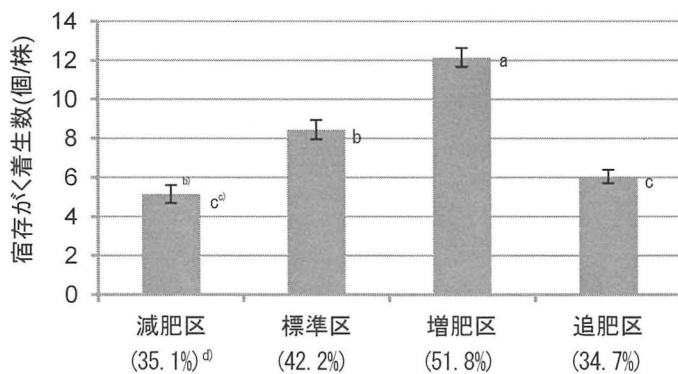
試験区	株高 (cm)	株径 (cm)	葉色 (SPAD値)	節数 (節/株)
減肥区	36.2 c <sup>b)</sup>	33.0 c	33.4 c	14.8 d
標準区	52.2 b	40.4 b	37.8 b	20.2 b
増肥区	68.8 a	46.6 a	41.7 a	23.6 a
追肥区	42.8 c	33.8 c	37.4 b	17.6 c

<sup>a)</sup> 耕種概要：底面給水型の5号鉢を用いて2009年4月10日に定植、7月24日に調査

試験規模は5鉢/試験区、仕立て本数は4本/鉢

施肥は培土 1L 当たり窒素成分で、減肥区 1.25g(基肥)、標準区 2.5g(基肥)、増肥区 5.0g(基肥)、追肥区 1.25g(基肥) + 1.25g(追肥) を施用

<sup>b)</sup> Tukey の多重検定により、各項目の異符号間に 5%水準で有意差あり



第3図 施肥量の違いが‘佐賀H2号’の宿存がく着生数に及ぼす影響<sup>a)</sup>

<sup>a)</sup> 耕種概要：第11表と同様

<sup>b)</sup> Barは標準誤差を示す

<sup>c)</sup> Tukeyの多重検定により、異符号間に5%水準で有意差あり

<sup>d)</sup> ( )の数値は、宿存がく着生率を示す(宿存がく着生節数/全節数\*100)

## 2) 鉢容量と草姿の関係

‘佐賀H2号’は、施肥量の違いによる地上部の生育量への影響が、‘佐賀H1号’と比較して大きかったことから、鉢容量の違いによる影響も大きいことが予想される。鉢容量が小さい鉢ではコンパクトな鉢姿、大きい鉢ではボリュームのある鉢姿となり、鉢容量に応じた鉢姿となることが想定できる。そこで、5号鉢(直径12cm)での栽培を対照として、小さい鉢容量の4号鉢(直径12cm)および大きい鉢容量の6号鉢(直径18cm)で栽培した場合の鉢姿について検討した。なお、施肥は、基肥として培土1L当たりに窒素成分で2.5gをエコロング100日タイプ(14-12-14)により施用した。地下茎を2010年4月13日に底面給水型プラ鉢に定植し、4号鉢では1鉢当たり3本仕立て、5号鉢および6号鉢では1鉢当たり4本仕立てとなるよう整枝した。

出荷時の7月26日における鉢姿は、4号鉢、5号鉢、6号鉢と鉢容量が大きくなるにつれて、株高も有意に大きくなり、地上部の生育量は鉢容量に比例した(写真5、第12表)。1株当たりの節数および宿存がく着生数も鉢容量が大きくなるにつれて、増加する傾向にあった。また、宿存がく着生率は、すべての鉢容量で50%程度であり、「実飛び」現象はみられなかった。

したがって、‘佐賀H2号’は、4号鉢、5号鉢、6号鉢と栽培する鉢容量を大きくするにつれて、地上部の生育も旺盛となり、宿存がくの着生率を低下させることなく、鉢姿を制御できることが明らかとなった。

第12表 鉢容量の違いが‘佐賀H2号’の生育に及ぼす影響<sup>a)</sup>

鉢容量	株高 (cm)	節数 (節/株)	宿存がく着生数 (個/株)	宿存がく着生率 <sup>b)</sup> (%)
4号鉢	64.4 c <sup>c)</sup>	21.3 b	11.1±0.61 ab	51.6
5号鉢	77.2 b	22.6 ab	10.3±0.40 b	45.4
6号鉢	98.1 a	24.4 a	13.2±0.69 a	54.1

<sup>a)</sup> 耕種概要：底面給水型の鉢を用いて、2010年4月13日に定植、7月26日に調査

試験規模は5鉢/試験区、仕立て本数は4号鉢で3本/鉢、5号鉢および6号鉢で4本/鉢

施肥は培土1L当たりに窒素成分で2.5gを基肥として施用

<sup>b)</sup> 宿存がく着生率=宿存がく着生節数/全節数\*100

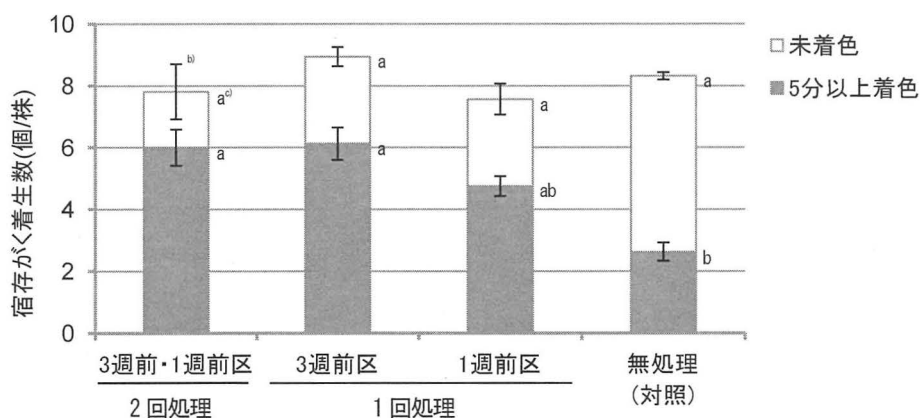
<sup>c)</sup> Tukeyの多重検定により、各項目の異符号間に5%水準で有意差あり

### 3) 植物成長調整剤(エテホン)による宿存がくの着色促進

切り枝ホオズキは、着生した宿存がくが完全着色した状態での出荷となるため、宿存がくの着色促進処理としてエテホン 125ppm (エスレル 10、800 倍液) を出荷の 3 週～4 週前に散布し、その後も着色状況に応じて、2 回目、3 回目の散布が行われる。そこで、本試験では鉢物ホオズキの宿存がくの着色促進のためのエテホン処理時期について試験した。なお、鉢容量は 5 号鉢(直径 15cm) を使い、施肥は基肥として培土 1L 当たり窒素成分で 2.5g をエコロング 100 日タイプ(14-12-14) により施用した。地下茎を 2011 年 3 月 16 日に底面給水型プラ鉢に定植し、1 鉢当たり 4 本仕立てとなるよう整枝した。試験区は、7 月上旬の出荷を目標に、無処理区を対照として、エテホン 125ppm を出荷 3 週前の 6 月 14 日と 1 週前の 6 月 28 日に 2 回散布する 3 週前・1 週前区、出荷 3 週前の 6 月 14 日に 1 回散布する 3 週前区、出荷 1 週前の 6 月 28 日に 1 回散布する 1 週前区を設定した。鉢物ホオズキは、宿存がくの着色過程も観賞目的とするため、着生した宿存がくの内、五分以上着色したものが 7 割程度に達した状態を出荷時の鉢姿とした。

出荷時の 7 月 8 日における鉢姿は、無処理区では、下位節の宿存がく着色が始まった段階であり、五分以上着色した宿存がくは 2～3 個と、着生した宿存がくの 3 割程度であった。すべてのエテホン処理区では、中位節～上位節まで宿存がく着色が進み、五分以上着色した宿存がくは 5～6 個と、着生した宿存がくの 6 割～7 割に至った(第 4 図)。エテホン処理の時期としては、3 週前・1 週前区および 3 週前区は、五分以上着色した宿存がくは約 6 個で、両試験区間に有意な差は認められなかった。また、1 週前区は、五分以上着色した宿存がく数は約 5 個で、3 週前区と比較すると、やや少ない傾向にあった。

エテホン処理は宿存がくの着色促進だけでなく茎葉類の老化を促進させてしまうため、できるだけ処理回数は少ない方が好ましい。したがって、‘佐賀 H2 号’ の鉢物栽培における宿存がくの着色促進には、エテホン 125ppm を出荷 3 週前に 1 回散布すれば十分であることを明らかにした。



第 4 図 エテホン処理が‘佐賀 H2 号’の宿存がく着色に及ぼす影響<sup>a)</sup>

<sup>a)</sup> 耕種概要：底面給水型の鉢を用いて、2010 年 4 月 13 日に定植、7 月 26 日に調査

試験規模は 5 鉢/試験区、仕立て本数は 4 本/鉢

施肥は培土 1L 当たり窒素成分で 2.5g を基肥として施用

<sup>b)</sup> Bar は標準誤差を示す

<sup>c)</sup> Tukey の多重検定により、異符号間に 5%水準で有意差あり

## V 考察

ホオズキ(*Physalis alkengi* L. var. *franchetii* Makino)は、東アジア原産のナス科の多年草であり、古くから薬用植物や観賞用植物として利用されてきた<sup>5)</sup>。7月～8月のお盆の時期になると、日本の各地域で「ほおずき市」が開催され、多くの鉢物ホオズキや切り枝ホオズキが流通する。特に代表的な「ほおずき市」は、東京の浅草寺で毎年、四万六千日に当たる7月9日～10日に開催されるもので<sup>6)</sup>、茨城県産の鉢物ホオズキや静岡県産の切り枝ホオズキが出荷されている。近年では、茨城県、静岡県に加えて、九州でも大分県、鹿児島県、福岡県と、栽培する産地が増加してきている<sup>7)</sup>。県内でも、北部地域を中心に様々な地域で栽培されており<sup>2)</sup>、栽培性が優れる品種への要望も大きかったことから、品種育成に取り組み始めた。

当初の育種目標は切り枝用品種としていたが、「佐賀H1号」および「佐賀H2号」は、水平方向に広がる特徴的な草姿および宿根がくの着生が優れるコンパクトな草姿から、鉢物としての適性を見だし、品種登録出願するに至った。育成当時、鉢物ホオズキとしての栽培技術について未確立な部分が多かったことから、「佐賀H1号」および「佐賀H2号」の品種特性を活かした鉢物栽培技術の確立に取り組み、施肥量が両品種の草姿に大きく影響することを明らかにした。

一般的に、ホオズキ栽培において、施肥量は宿根がくの着生数減少につながる大きな要因であり、最も留意が必要な栽培条件である。増肥条件下では栄養成長に偏り、また、減肥条件下では生育不良に陥り、花蕾が着生せずに宿根がくの着生数減少が引き起こされる。しかし、「佐賀H1号」および「佐賀H2号」では、施肥量は地上部の生育量に大きく影響したものの、宿根がくの着生数への影響は小さく、両品種は、宿根がくの着生に関しては施肥量による影響を受けにくい特性を有していることが示唆された。

一方で、両品種は、宿根がくの着色が従来の系統と比較すると極端に遅い特性も有しており、「佐賀H2号」は切り枝用としても期待されたが、完全着色させた状態で出荷する切り枝栽培には不向きであることも明らかになった。「佐賀H2号」の宿根がく着色遅延の形質を改良することができれば、栽培性が非常に優れた切り枝用品種となる可能性が高く、県内ホオズキ農家へ大きく普及することが期待できる。そこで、切り枝用品種の育成として、「佐賀H2号」を交雑親に用いて得られた後代の中からの選抜に取り組んでいる。

これまでに、ホオズキの品種育成に取り組んでいる県や種苗会社は少なく、「佐賀H1号」および「佐賀H2号」以外の登録品種としては福岡県が育成した「姫提灯」(登録番号 第18720号、2009年12月21日登録)のみである。他県のホオズキ産地では、それぞれの地域で系統選抜により選抜されてきた在来系統を栽培されていることが多い。近年、全国的にウィルス回避策として実生栽培が推進されているが、固定が不完全な在来系統は実生栽培すると、形質がバラつき、安定生産ができない。「佐賀H1号」および「佐賀H2号」は、自殖を繰り返して固定を完了した品種であり、実生栽培による安定生産が可能である。このように、品種の育成に取り組むことは、他産地との差別化を図る上でも重要と考えられる。

また、鉢物ホオズキ「佐賀H1号」および「佐賀H2号」の販売戦略について、関係機関や団体等で検討し、両品種の愛称をそれぞれ「姫風船」および「夢風船」と設定した。「佐賀H2号」は従来のホオズキらしい草姿であるため、鉢物ホオズキ品種としても定着しつつある。一方で、「佐賀H1号」は特徴的過ぎる草姿のために、ホオズキとしては受け入れられず、あまり定着していない。よって、「佐賀H1号」は新たな作型開発等によって、ホオズキらしくない草姿を活かし、新規需要を模索することが必要と考えられる。

今後、鉢物用品種「佐賀H1号」および「佐賀H2号」に加えて、切り枝用品種、実とり用品種と、用途に応じた品種の充実を図り、関係機関と協力した取組みを進めていくことで、これら育成品種による佐賀ホオズキのブランド確立が期待される。

## VI 摘要

‘佐賀H1号’および‘佐賀H2号’は、‘米国自生野生系統’を種子親、‘佐賀市大和町在来紫茎変異系統’を花粉親とした交雑組合せから育成された鉢物適性に優れたホオズキ品種で、2007年に品種登録出願を行い、‘佐賀H1号’は2009年に、‘佐賀H2号’は2010年に品種登録された。両品種の特性は、次のとおりである。

‘佐賀H1号’は、数枚の葉を展葉した後に、茎頂に花(宿存がく)が着生して芯止まりとなり、側枝が伸長していく。これを繰り返すため、匍匐しながら水平方向に広がっていく特徴的な草姿となる。花は、1節に2花以上が着生し、宿存がくも1節に2~4個が着生する。また、宿存がくは、小振りで整った形状のものが着生し、成熟すると明赤橙色に着色する。そのため、‘佐賀H1号’の鉢物は、茎葉が叢生して繁茂し、鉢からこぼれるように着生した宿存がくを觀賞することができる。

‘佐賀H2号’は、一般的なホオズキと同様に直立性であり、垂直方向に伸長していく草姿となり、草丈はやや短い。花は、1節に2花以上が着生し、宿存がくも1節に2個以上が着生する節もみられ、1株当たりの着生数もかなり多い。また、宿存がくは、小振りで整った形状のものが着生し、成熟すると明赤橙色に着色する。そのため、‘佐賀H2号’の鉢物は、草丈伸長抑制のためのわい化剤利用の必要が無く、下位節から上位節まで連続的に着生した宿存がくを觀賞することができる。

## 引用文献

- 1) 村井千里・1994. 農業技術体系. 花卉編第9巻. 「ホオズキ」 p.649-651. 農文協, 東京.
- 2) 佐賀県園芸課・2016. 平成26年産主要花き生産状況. 花き関係資料 p.2-5.
- 3) 佐賀県農業協同組合・2016. 平成28年度産ほおずき販売実績(花市場別JA別). JAグループ佐賀関係資料
- 4) 渡辺憲司監修・2006. 「縁」を結ぶ日本の寺社参り. 青春出版社, 東京.
- 5) 石井林寧. 1983. 最新園芸大辞典第9巻. *Physalis* L. (フィサリス属) ホオズキ属. p.105-106. 誠文新光社, 東京.

## Summary

‘Saga H1’ and ‘Saga H2’ are new chinese lantern plant cultivars which were developed from the progenies of the cross between ‘Wild species from United States’ and ‘Local variety from Saga which a stem mutated in purple’ at Saga Prefectural Agricultural Research Center in 2007. They are superior in the appropriateness as the potted plants.

‘Saga H1’ has a characteristic plant shape which opens horizontally. It is become self-topping and flower setting after leafing several leaves. And, the lateral shoots are grown. The several flowers are set at a node. The calyces are small and well formed, and became the reddish-orange when it ripens. Therefore, we can admire calyces which set spilling out the pot in potted plant of ‘Saga H1’.

‘Saga H2’ has a plant shape which grows perpendicularly as same as standard chinese lantern plant,



but the plant height is a little low. The several flowers are set at a node. The calyces are small and well formed, and become the reddish-orange when it ripens. Therefore, we can admire the calyces which set continuous from the bottom to the top in potted plant of 'Saga H2' .

附表1 育成品種の品種登録出願までの試験従事者

試験年度	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006
	交雑 選抜・自殖			→				
試験内容						栽培適応性	→	
							商品性	→
								現地適応性
								出願
従事者	○	○	○		○			○
大藪榮興	○	○	○		○			○
中村典義	○	○	○		○			○
松尾洋一					○			○
松村司					○			○

附表2 品種登録出願以降の鉢物栽培技術確立に関する試験従事者

試験年度	2007	2008	2009	2010	2011
試験内容	現地実証			→	
				栽培技術確立	
				→	
従事者	○				○
大藪榮興	○				○
高取由佳	○				○
松村司	○				○
川崎孝和		○		○	
千綿龍志			○		○



写真1：‘佐賀H1号’の鉢物としての草姿



写真2：‘佐賀H2号’の鉢物としての草姿



標準区 減肥区 増肥区 追肥区

写真3：基肥施用量の違いが‘佐賀H1号’の鉢姿に及ぼす影響



標準区 減肥区 増肥区 追肥区

写真4：基肥施用量の違いが‘佐賀H2号’の鉢姿に及ぼす影響



4号鉢 5号鉢 6号鉢

写真5：鉢容量の違いが‘佐賀H2号’の鉢姿に及ぼす影響